

令和7年度

一般選抜試験（前期日程）

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて6ページあります。また解答用紙2枚と下書用紙1枚が配付されています。
- 試験中に問題冊子や解答用紙、下書用紙の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入してください。
 - （1）受験番号欄
 - （2）氏名欄
- 4 受験番号、氏名が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
- 5 設問の字数には句読点が含まれます。
- 6 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

希望出生率は1・8

我が国の出生率は1・45と低いが、若い世代には、結婚し子どもを持ちたいという希望が強い。

18歳から34歳の未婚男女を対象とした意識調査（社人研「出生動向基本調査」2015年）によると、「いずれ結婚するつもり」と答えた人の割合は男性が85・7%、女性が89・3%に達しており、若い世代の多くは結婚の希望を抱いている。ところが実際は、2015年の未婚率は、25歳から29歳で男性は72・7%、女性は61・3%、30歳から34歳で男性47・1%、女性34・6%となっており、希望と現実の間の乖離は大きい。

また、結婚した夫婦のほとんどが、子どもが欲しいと思っている。理想とする子ども数は、平均で2・32人となっており、予定子ども数（現存の子ども数に追加予定の子ども数を加えた数）も平均で2・01人である。この水準は、諸外国の状況から見てもかなり高く、1980年代後半から今日に至るまで、ほぼ安定的に推移している。

こうした若い世代の結婚、子育ての希望が実現するならば、日本の出生率は1・8程度の水準にまで向上すると見込まれる。これは、若い世代の結婚に対する希望割合に、希望する平均子ども数乗じるなどの方法により算出したもので、「希望出生率」と呼ばれている。

（中略）

高出生率国と低出生率国は何が違うか

フランスやスウェーデンのように出生率が高い国と日本や韓国など低い国とでは、出産状況がどのように違うのかを見てみよう。そうすると、構造的な違いがあることが分かる。

A女性の「出産年齢」の違いである。

女性は何歳の時に子どもを出産しているかを示す「年齢階層別出生率」を国別に比較したものを見ると、出生率が高いフランス（1・99）では、年齢別出生率は20歳代前半から高く、20歳代後半と30歳代前半の二つのピークがある形となっている。スウェーデン（1・88）も20歳代前半の出生率が比較的高い。

これに対して、出生率が低い韓国（1・21）、日本（1・45）やドイツ（1・47）は、20歳代の出生率が低く、ピークは30歳代前半のみで、しかもフランスやスウェーデ

ンより低い。一方、30歳代後半の出生率になると、国のバラツキは縮まり、40歳代以降の出生率はいずれの国も非常に低い。

このように一般的には、出生率の高い国ほど、女性の出産年齢が全体的に早い。より正確に言えば、出生率の違いのかかなりの部分は、20歳代の出生率の状況が影響していると言える。例えば、韓国は、30歳代前半の出生率は相当高い水準にありながら、20歳代の低さが原因となつて、アメリカはもとより日本よりも低い出生率となっている。日本の場合は、結婚年齢の遅れと、それに伴う出産年齢の遅れが、出生率全体を引き下げていると言える。ただし、フランスやスウェーデンとの比較では、日本は、20歳代のみならず、30歳代前半でも差があり、30歳代前半についても出生率向上は重要な課題と言えよう。

(中略)

結婚、子育てと年収

こうした状況を踏まえ、日本の若い世代が希望どおりの年齢で結婚し、子どもを持つためには、どのような環境を整備していく必要があるかを考えてみたい。

20～30歳代の結婚を希望する未婚者を対象に行った内閣府「結婚・家族形成に関する意識調査(2010年度)」によると、「今まで結婚していない理由」として最も多かったのは「適当な相手にめぐり合わないから」(男性55・0%、女性58・2%)であるが、2番目及び3番目は「結婚後の生活資金が足りないと思うから」(男性38・6%、女性24・3%)、「結婚資金が足りないから」(男性33・1%、女性20・7%)であった。結婚に対する個人的な意識の違いは大きいとしても、経済的な理由をあげる若い世代(特に男性)が相当な割合にのぼることが目を引く。若い世代の経済基盤をめぐる問題である。

全国と札幌市の20～30歳代の男女を対象にした調査結果(2016年)によると、「結婚生活に必要と考える夫婦の年収」は、全国で約490万円、札幌市で約460万円であった。さらに、「欲しい人数の子どもを持つにあたって必要と思う夫婦の年収」は、札幌市では未婚者は約590万円、既婚者は約640万円となっている。一方、2015年分民間給与実態統計調査では、男性の平均給与は20歳代後半で383万円、30歳代前半で451万円、30歳代後半で510万円、40歳代前半で567万円なので、男性のみの平均給与で見れば、結婚のハードルは30歳代後半でやっと超え、子育てのハードルは40歳代前半になってもまだ超えられない計算となる。

必要とする年収が若干高めに考えられているとしても、現状では20歳代のうちに結婚し、子どもを持つにはハードルが相当高いと言える。実際に結婚している状況から見ると、男性では年収300万円が一つの「壁」となっていると言われ、年収300万円以上と未満では結婚割合が大きく異なっている。

そうした中で懸念されるのが、年収が低い非正規雇用や無業者である。男性の就労形態別に見た結婚割合を比較すると、20歳代後半では、正規の結婚割合が約32%に対して非正規は約13%、30歳代前半では同じく約58%に対して約23%と、両者の間には2倍を超える格差があることが分かる。正規と非正規の賃金格差は大きく、その格差が結婚の状況にそのまま表れている。1990年代後半以降、日本の雇用システムが大きく変わっていった時期に **B**「第三次^(注)ベビーブーム」を喪失した構図が、こうした実態からも明らかになってくる。

共働きと結婚、出産

そこで、結婚や子育てに必要な年収が1人分の収入では足りなくても、結婚後も「共働き」をしながら、子どもを産み育てることができるならば、経済面での結婚や出産のハードルは下がるはずである。

女性の結婚や出産後の就労継続は、女性のキャリアを活かした社会参画や能力発揮という点において重要性を増している。一方、女性就労と出生率の関係については、どうか。この点については、専門家の間でも様々な分析が行われてきた。各国の動きを研究している筒井淳也^{じゅんや}氏は、「雇用労働に従事する女性が増えるにつれて、どの国でも出生率が下がることになった。しかし女性の労働力参加が出生率へ与える負の影響は、アメリカやスウェーデンといった少子化を克服した国においては、ある時点から中和されるようになった。

(中略)その後、女性の労働力参加と出生率との関係はいよいよ反転し、**C**女性が働くことは出生率に正の効果を持つようになる。これは不況あるいは経済成長の鈍化のなかで若年者の雇用が不安定化し、それへの対応として男女がカップルを形成し、共働きによって生計を維持するというケースが増えたからである」(『仕事と家族』)と述べている。従来は、女性の就労や共働きは出生率にとってはマイナスであるという見方が強かったが、今日の社会経済情勢では、むしろ結婚を後押しするという点で、プラス効果が期待できるというものである。

筆者は、現在、札幌市長のリーダーシップの下で女性一人ひとりが希望に応じて活躍できるまちづくりを目指す「さっぽろ女性応援会議」に参加している。この会議の中でも同じような指摘がなされており、札幌市の出生率が1・18（2015年）と全国に比べて低い水準にとどまっている背景の一つとして、共働き率が低いことがあげられている。出生率が1・65（2016年）、未婚率の低さでは全国一位の福井県の共働き率58・6％と比べると、札幌市の共働き率は40・6％で20ポイント近い差がある。女性活躍の機会の拡大とともに、結婚や出産の希望を実現する観点から、共働きが選択できるような環境整備、すなわち、「仕事と子育ての両立支援」が重要となってきている。

（山崎史郎「人口減少と社会保障」中公新書 2022年7版より抜粋、一部改変）

（注）ベビーブーム：社会情勢などにより出生率が高くなる現象。日本では戦後間もなくの1940年代後半と、その世代が親になる1970年代前半にベビーブームが訪れている。

問 1 **A** 女性の「出産年齢」の違いとはどのような違いか、50字以内で説明しなさい。

問 2 **B** 「第三次ベビーブーム」を喪失したのはどうしてだと思いますか。本文より推察して80字以内で説明しなさい。

問 3 **C** 女性が働くことは出生率に正の効果を持つようになるのはどうしてか。文章全体の主張を踏まえて、「結婚後も女性が働くことにより、」に続けて合計60字以内で説明しなさい。

問 4 少子化対策として出生率を上げるために、職場ではどのような工夫が必要だと思いますか。本文を踏まえ、ダイバーシティ（多様性）にも配慮しながら、医療現場を例に500字以内であなたの意見を述べなさい。

出題のねらいと採点のポイント

問1

出題のねらい

本文から重要な部分を抽出することができる。

採点のポイント

- ① 20 歳代の出生率について述べている。
- ② 出生率の高い国では出産年齢が早い、または出生率が低い国では出産年齢が遅いことを述べている。

問2

出題のねらい

社会情勢に関心を持ち、その原因や結果について考えを述べることができる。

採点のポイント

- ① 非正規雇用が増えたことについて述べている。
- ② 収入が足りないことについて述べている。
- ③ 結婚できないことについて述べている。
- ④ 出生率が増加しなかった（あるいは低下した）ことについて述べている。

問3

出題のねらい

文章の論理構造を理解し、簡潔にまとめることができる。

解答例

結婚後も女性が働くことにより、20 歳代の夫婦でも子どもを育てるのに十分な収入を得ることができるようになるため。(55 字)

採点のポイント

- ① 20 歳代など若い時期に言及している。
- ② 夫婦としての収入が増えることを述べている。
- ③ 子どもを育てることを述べている。
- ④ 書き出しの文も含め、文章の整合性が取れている。

問4

出題のねらい

本文の内容を踏まえ、医療職についての自分の意見を述べることができる。また出産や子育てについては差別や偏見にも注意しなければならない問題であり、ダイバーシティへの配慮が必要である。

採点のポイント

- ① 「共働き」か「若年での出産」に言及している。
- ② 女性が多い、専門性がある、生命を扱うなど医療現場の特徴を述べている。
- ③ ダイバーシティ（多様性）に配慮した記述がある。